

美容医療が患者の心理面に及ぼす影響

介護予防マネジメントコース

5007A341-5 山本志保

研究指導教員： 岡浩一朗准教授

【緒言】

美容とは「容貌・容姿・髪型を美しくすること」の意味を持ち、特に女性たちは美意識を高め、多方面から美しく見せるためにいろいろな方法を見出し、文化の中に取り入れられてきた。現代社会において、生き方の多様化等から、美容に対する関心の幅を広げ、美容の選択肢として、消極的水準である化粧などから積極的水準である美容医療などが多岐にわたり存在し、近年、本邦だけでなく諸外国にわたり、外貌の美しさを手に入れようと、美容医療を手段として受け入れる人が増加している。しかし、外貌変化を施すことにより、精神的活性に応用する試みを支持する先行研究としては、化粧・被服など消極的水準の外貌変化による様々な研究報告がなされているだけで、積極的水準である美容医療を用いた心理面に関する学術的研究は、諸外国においてもわずかに認められるのみである。本邦においては、美容医療に関する心理的研究は、美容医療を受ける前の身体的満足度による整形願望をみた研究や、精神科領域からみた美容医療への言及しかなく、美容医療が患者の心理面に及ぼす影響を詳細に検討した研究は我々の知る限り認められない。美容医療は、自分自身の外貌の現状に満足できず、外貌変化の意思をもつことに始まり、手術の必要性、術後の満足感も患者本人によって決定されることから、美容医療に携わる専門家が、施術による患者の心理面に及ぼす影響を理解することが必要であると考えられる。

【目的】

本研究では、美容医療ではほとんど明らかにされてこなかった患者の心理面に着目し、女性特有の美容医療である豊胸手術(脂肪幹細胞注入法)を取り上げ、豊胸手術を施行した患者の精神的活性、特に不安や抑うつ、気分の変化について明らかにすることを目的とした。

【方法】

対象：豊胸手術(脂肪幹細胞注入法)が予定された患者のうち、手術前後の調査への同意、回答が得られた女性 17 名(平均年

齢 32.9 歳±7.1)を分析対象とした。

方法：手術前および手術後 1 か月の 2 時点において、不安と抑うつを測定する Hospital Anxiety and Depression Scale(HADS)日本語版(八田 他,1998)気分状態を測定する Face Scale(Loris 他,1986)を用いて術前後の比較検討を行った。また、手術後には術後の行動や感情の変化を調べるためのアンケート調査も実施した。

【結果】

1. 手術前後での不安、抑うつ、気分の変化
豊胸手術前後における不安、抑うつ、気分得点の変化は有意であった。手術後 1 か月時点における心理状態は、手術前に比べて不安、抑うつが軽減し、気分の改善が認められた。
2. 不安、抑うつの判定結果
手術前に高不安、高抑うつと判定された割合が術後には低減し、術前に抑うつが高いと判定された対象者は、術後には一人も認めなかった。また、術前に不安が高いものが比較的高い割合で認められた(図 1)。
3. 術後アンケート結果
行動や感情に関する問いに対する回答の結果、行動変化では「身だしなみへの気配り」、「鏡をみる回数」、感情では「豊胸に対しての満足感」に対する評価が高かった。

【考察】

化粧による心理的効果を検討した先行研究において、化粧を施すことにより精神活性を認める報告があり、外貌変化における水準の差異はあるものの、本研究の結果においても同様に精神活性を認める結果が得られた。

また、HADS における不安、抑うつの判定結果より、本研究において、手術前の高不安群、高抑うつ群の割合は、口腔外科手術患者を対象とした先行研究に比べて比較的高い。また、手術前後で比較すると、豊胸手術患者は高不安群、高抑うつ群とも低下するが、口腔外科手術患者に関しては、高不安群は低下するが、高抑うつに関しては、手術前後とも高くなく、術後に有意に低下する

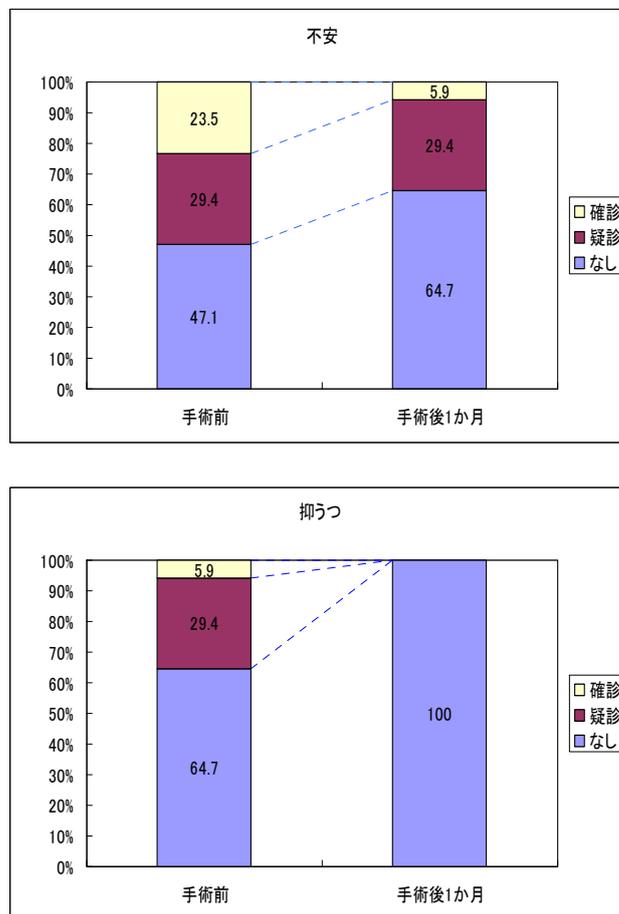
こともなかったと報告している。本研究では、不安に関しては同様の結果であったが、抑うつに関しては異なる結果を得た。これらは、手術内容の違いや、測定した時期の違いなどが影響を及ぼしていると考えられる。また、高不安の割合は、口腔外科手術患者や一般成人女性に比べ、手術前後とも高く、病的なものなのか、外貌を変える上で身体感覚に神経質になっていないかなど、豊胸手術に関して特異的なものなのか、今後検討すべき点である。

手術後のアンケート調査からは、術後に外貌に対する意識が増していることが分かった。化粧に着目した先行研究では、「化粧した後に会う他者から好ましい反応がフィードバックされると、これに対して満足度が高まり、化粧行動がさらに増加するという循環が生じる」、「社会的な相互作用を行う上で有効な表現力の中に外見魅力がある」と指摘されている。つまり、外貌変化により、他者からの反応も良ければ、さらに美しく見せようと行動を起こすことが考えられる。本研究の結果も、美容医療において施術後のボディイメージが理想に近づいたことへの満足感から得られたことを反映したものだと考えられる。しかし、外貌変化による、行動変化の研究は少ないため、今後さらに追求していく必要があると思われる。

【まとめ】

本研究の結果を総合的に判断すると、豊胸手術による美容医療が、患者にプラスの心理的効果をもたらす可能性があることが示唆された。今後、この分野の研究を発展させるための課題として、美容医療は自由診療であるうえで、調査協力者が少なく、偏った集団である点が少なからず、本研究の結果に影響を及ぼした可能性がある。また、施術内容、担当医師を一人に絞ったことで生じる

バイアスも考えられ、研究結果の一般化には注意を要する。しかし、本研究は美容医療を学術的に取り扱っていく段階として、意義ある結果を提示できたと考えられる。アンチエイジングが注目される中、今後も社会のニーズが伸びる分野だと考えられるため、さらなる研究データの蓄積を図っていく必要があると思われる。



(図 1) ADS 得点における不安・抑うつの判定区分別度数分布の推移